

荒神山古墳

—平成15・16年度 範囲確認調査概要—



平成17年3月

彦根市教育委員会

目 次

例言

Iはじめに	1
II位置と環境	1
III調査の成果	3
荒神山古墳の概要	3
出土埴輪の検討	10
IVおわりに	12

例 言

1. 本書は、彦根市教育委員会が平成15・16年度の国庫補助事業として実施した荒神山古墳の範囲確認調査の成果を納めたものである。
2. 本調査の調査地は、彦根市清崎町字山之腰1925番、日夏町字日夏山4795番3、三津屋町字山ノ子1264番、石寺町字山王山1番1に位置する。
3. 本調査は、平成15年6月9日～8月12日及び平成16年8月2日～11月10日の間に現地調査を行い、その後資料整理を行った。
4. 本調査は、彦根市教育委員会文化財課が実施した。平成16年度の調査の体制は下記のとおりである。

課長：花木 勉	課長補佐（兼係長）：三浦 順
副主幹：尾崎 洋	主査：谷口 徹
主任：志賀昌貢	主任：水谷千恵
主事：西村真理子	臨時職員：早川 卒
5. 本調査には以下の諸氏が参加した。
（平成15年度）及川一貴、谷居匡、濱田宏明、宮川国昭、森勝美
（平成16年度）角井信也、中尾千尋、真野一、増田洋平（滋賀県立大学大学院生）、
大木要・中居和志・村上英友紀・田中萌子（以上滋賀県立大学学生）
6. 本調査の期間中には、滋賀県教育委員会田中勝弘氏、滋賀県立大学高橋美久二氏、
林博通氏、滋賀大学小笠原好彦氏、滋賀県立琵琶湖博物館用田政晴氏のご指導を受け、また調査後の埴輪の整理においても滋賀県文化財保護協会辻川哲朗氏のご教授を得た。
7. 本書は谷口と早川が執筆し、それぞれ文末に記した。
8. 本書で使用した方位は、平面直角座標第IV系の座標北に、高さは東京湾平均海面に基づいている。
9. 本調査で出土した遺物や写真・図面等は彦根市教育委員会で保管している。

I はじめに

荒神山は、これまで古墳時代後期の群集墳が存在することは良く知られていたが、荒神山古墳については埴輪片が散布するなど一部の研究者にその存在が知られるだけであった。平成14年3月から4月にかけて、滋賀県立大学考古学研究室と彦根市史編さん室が、市内遺跡の資料作成事業の一環として当古墳の測量調査を実施し、全長約114mの前方後円墳を想定した。これらの成果を受けて、彦根市教育委員会文化財課では、平成15年度に6箇所、平成16年度に6箇所の試掘トレンチを設定して古墳の確認調査を実施した。平成15年度の現地の調査は6月9日から8月12日まで、平成16年度は8月2日から11月10日までを要した。平成16年度の調査では、測量法に基づく基準点（3級・4級）の設置と補足測量も併せて実施した。調査にあたっては荒神山神社をはじめ地元土地所有者の方々のご協力を得た。厚くお礼を申し上げたい。

（谷 口）

II 位置と環境

荒神山古墳は、湖東平野に聳える独立丘陵の荒神山（284m）山頂北側にある前方後円墳である。墳丘上からは眼下の琵琶湖をはさんで、湖西や湖北、湖東平野北部など、ほぼ近江の北半分を一望することができる。逆に芹川・犬上川・宇曾川・愛知川流域など湖東平野北部からはどこからでも荒神山を仰ぎ見ることができる。このような立地は、被葬者の性格を考える上で無視できない要素と言えよう。

荒神山古墳が位置する湖東北部地域では、雪野山古墳や安土瓢箪山古墳が位置する湖東南部地域に対して、前・中期の古墳はながらく確認されて来なかつたが、近年の調査の進展に伴いそれらが存在していたことが明らかとなって来ている。

神郷亀塚古墳（能登川町）は愛知川左岸の和田山麓に位置する全長36mの前方後方墳である。葺石や埴輪は持たず、内部主体は木樋であった。西側には時期を同じくする斗西遺跡が広がっており、集落と墳墓の位置関係がうかがえる。近江における出現期古墳のひとつである。

延寿寺塚村古墳は、荒神山南麓の稻里町塚村にその存在が推定される。「近江輿地志略」や「近江愛智郡志」では、式内社稻村神社が荒神山中腹に移転するまで塚村の位置にあり、集落名も古墳があったことに由来するものと推定している。現在、塚村集落の周囲は水路がめぐり、集落部分だけが微高地になっている。明治の地籍図では馬蹄形の地割が現れており、それをもとにすると全長約105m、周濠を含めると約160mの前方後円墳が復元できる。立地や平面形からは中期古墳と考えられるが、埴輪などの遺物の散布はみられない。

このほか前・中期と推定される古墳としては中沢大塚古墳（能登川町）や安食西古墳（豊郷町）などが挙げられる。さらに彦根市域では八坂東遺跡・段ノ東遺跡が中期の、鳥籠山・茂賀山が時期不明の埴輪の出土地として知られている。以上の例の多くを平地の古墳が占め

ることを考えれば、今後丘陵上だけでなく平地に埋没した古墳が発見される可能性が高いと言えよう。

さて、これらの首長墳を営む母体ともいるべき当時の集落はどのようであったろう。

これまで荒神山周辺の遺跡は散布地が多く詳細が不明なものが多かったが、近年は農地改良工事や県道・農道整備に伴なう発掘調査が増加しつつある。

弥生時代には前期の遺跡として稻里遺跡が知られるが、集落遺跡が増加する傾向がみられるのは川瀬馬場遺跡・鶴ヶ池遺跡や妙楽寺遺跡など弥生時代中期以降である。

これらのうち荒神山古墳築造時期に近い弥生時代後期～古墳時代中期の遺跡では、荒神山北麓の宇曾川河畔に妙楽寺遺跡があり竪穴住居群や溝・土坑が検出されている。その上流に隣接する蛭目遺跡でも同じ時期の遺物が出土しており、宇曾川下流に当該期の集落が広がっていた可能性が高い。また、犬上川中・下流域でも、左岸の横地遺跡や堀南遺跡などで竪穴住居や方形周溝墓を検出し、右岸の品井戸遺跡や竹ヶ鼻遺跡・福満遺跡でも竪穴住居などを検出している。さらに荒神山の南山麓の愛知川流域では、稻部遺跡や普光寺廃寺遺跡、下岡部遺跡・屋中寺廃寺遺跡で多量の土器が出土し、芝原遺跡でも古墳時代前期の竪穴住居群を検出している。

このように、まだまだ不明な点が多いとは言え、荒神山古墳の周辺では多くの集落が存続していたことがうかがえよう。

(早川)

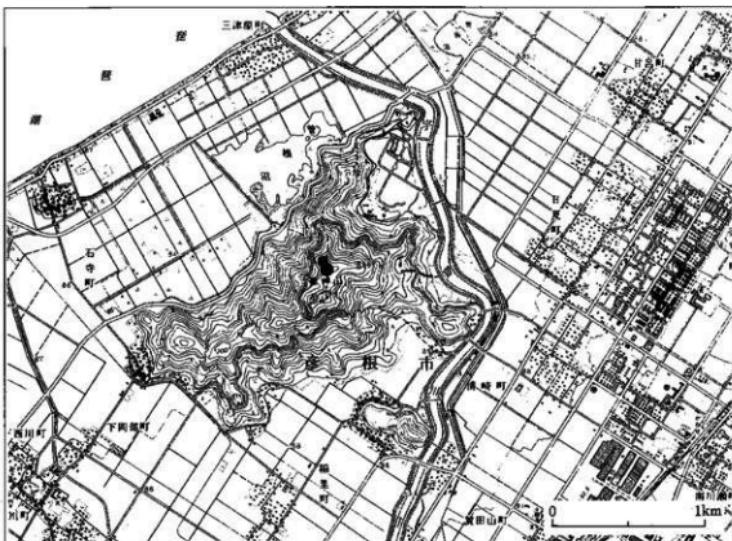


図1 荒神山古墳位置図

III 調査の成果

荒神山古墳の概要

荒神山古墳の実態を把握するため、試掘トレンチを設けて実施した今回の確認調査によつて、大きな成果を得ることができた。全長は、これまで想定してきた数値を上回る124mあり、墳丘は葺石で覆われ、前方部・後円部とも3段築成で、各段のテラスには埴輪が巡っていた。調査で判明した詳細は以下のとおりである。なお、紙面が限られているため、トレンチごとの成果は省略し、調査全体を通して得られた特徴を項目別に記していくことにしたい。

古墳の位置

荒神山古墳は、彦根市域の西方、琵琶湖岸に近い湖東平野の独立丘である荒神山(標高284.1m)の山頂から北へ約150m下った尾根頂部に位置する。尾根頂部の標高は278.0m、山麓との比高差は約190mを計る。古墳の墳丘は山麓の湖東平野側より、むしろ琵琶湖に向かって眺望が開けており、琵琶湖を意識した築造となっている点が注目される。古墳が築かれた当地は、かつての犬上郡と愛知郡の郡境に位置し、現在は彦根市日夏町(字日夏山)、清崎町(字山之腰)、三津屋町(字山ノ子)、石寺町(字山王山)の4つの町の境界線上に存在する。

古墳の規模

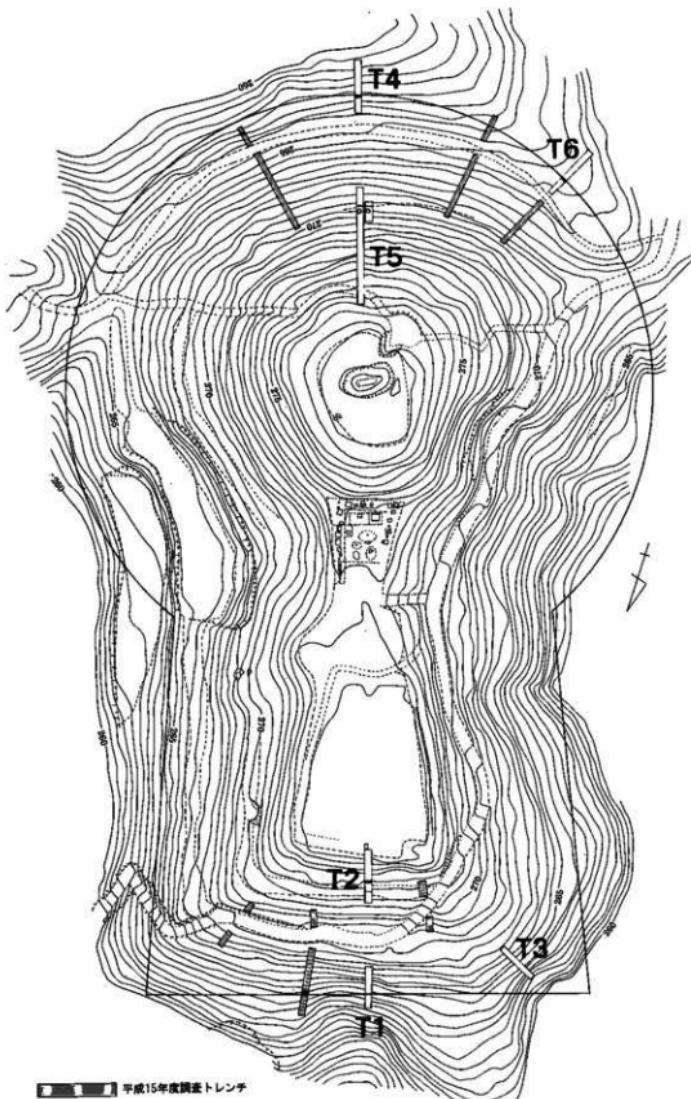
荒神山古墳は、主軸を北北西—南南東に置き、前方部を北西に広がる琵琶湖に向けた前方後円墳である。各部位の現状の計測値は以下のとおりである。

全長124m	前方部長約53m	後円部径約80m
前方部幅約61m	くびれ部幅約52m	
前方部高約10m	くびれ部高約9m	後円部高約16m

前方部の墳頂は、くびれ部近くが標高約272.5mで最も低く、幅も約9mと最も狭い。その反対に北北西の墳頂端は、標高約273.5mで最も高く、幅も約18mで最も広くなる。くびれ部と墳頂端の距離は約45mを測り、両者の比高差はわずかに1mである。くびれ部に荒神山神社の墓地が存在すること、墓地の前方部側にかつて金堤羅宮が建立されていたと言う伝えがあること、また『小佐治文書』に天文21年(1552)六角義賢が京極高広に対峙するため荒神山に本陣を置いたと記されており、その際に当地が砦として利用された可能性も考えられるなど、平坦な墳頂は後世の改変も考慮すべきである。一方、前方部の斜面には、墳頂端の北西隅と北西辺中央付近に地沿り跡と考えられる変形も認められる。

後円部の墳頂は、やや梢円形ながら直径約14mの平坦面を形成している。ただ、T5トレンチの断面図(図5)でも確認されるように、後円部構築後の土砂の崩落は著しく、墳丘の比較的高い箇所でも1m前後の堆積がある。墳頂の旧状も大幅な補正が必要であろう。

後円部の北東斜面には、長さ30m前後、奥行き8m余の2段からなる大きなテラスが存在する。このテラスも六角義賢の布陣などに起因する後世の改変と考えられる。



■ 平成15年度調査トレンチ

■ 平成16年度調査トレンチ

図2 調査トレンチ位置図

0 10 20 30m



前方部2段目テラス及び葺石
(T 2トレンチ)

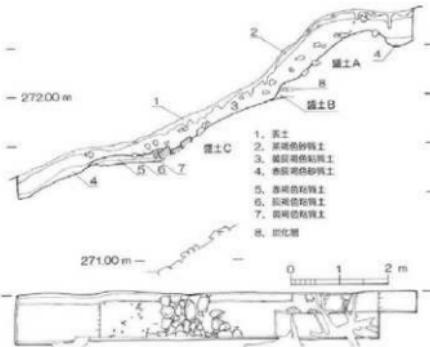


図3 T 2トレンチ平面図・断面図

古墳の構築法

荒神山古墳は、荒神山の山頂から伸びる尾根の鞍部を利用して築造された前方後円墳である。後円部は、南西側の尾根と東に伸びる尾根をそれぞれ開削して円形に整えており、その結果、後円部南側が周濠状を呈している。南西側の開削状況は、T 6トレンチ(図6)を入れて確認した。岩床化した地山を大きく碗状に開削しており、基底部で幅3.5mを測る。地山の上には、墳丘の盛土などの流入土が厚く堆積しており、最も深い箇所で1.6mあった。

後円部からさらに北北西に伸びる尾根を整形して古墳の主軸とし、そこに前方部・後円部とも2段のテラスを設けた3段築成の墳丘を築く。墳丘の断ち割り調査は実施していないので構築土の全容は不明だが、T 1からT 6のトレンチ調査で確認している墳丘の構築土は以下のよう整理できる。

下段(基底部～1段目テラス)

前方部の北西隅(T 3トレンチ)や北西辺中央(T 1トレンチ)、および後円部の南西側(T 6トレンチ)において湖東流紋岩の岩床が露出する箇所を確認しており、ある程度は自然の地山も墳丘に利用していたと考えられる。岩床の上にその風化土である淡灰褐色砂質土(盛土A)が盛土に供されている(T 1・T 4・T 6トレンチ)。

中段(1段目テラス～2段目テラス)

前方部では、北西辺中央(T 2トレンチ)で粘性に富む赤橙色粘土(盛土C)の盛土を検出した。また、後円部中軸線上(T 5トレンチ)では2段目テラス以下に地山の風化土である淡灰褐色砂質土(盛土A)が盛られている。

上段(2段目テラス～墳頂)

前方部では、北西辺中央(T 2トレンチ)で中段と同じ赤橙色粘土(盛土C)が下半に盛られ、その上に黄褐色粘質土(盛土B)が10cm余り層をなし、薄い炭化層をへて

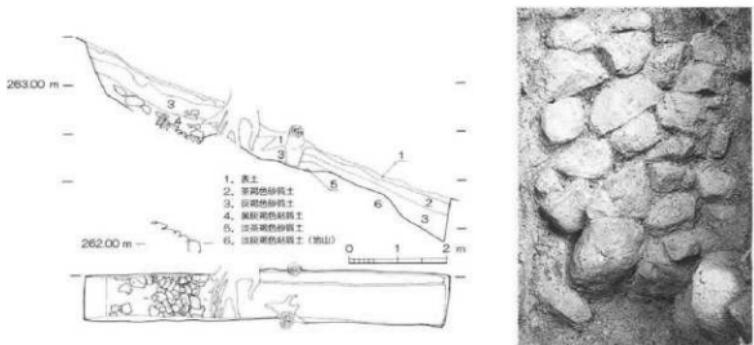


図4 T4トレンチ平面図・断面図

後円部の基底石と葺石
(T4トレンチ)

墳頂まで淡灰褐色砂質土(盛土A)が盛土を形成する。一方、後円部では、中軸線上(T5トレンチ)で下半約3mの高さに黄褐色粘質土(盛土B)を盛り、その上に赤橙色粘土(盛土C)を厚く盛り重ねる。盛土Bと盛土Cの間に生まれた傾斜のひずみには、下から黄灰褐色砂質土・灰褐色砂質土・赤褐色粘質土・赤灰褐色砂質土をそれぞれ層状に補填している。

段築

荒神山古墳は、尾根を整形して基底部とし、その上に前方部・後円部とも2段のテラスと墳頂平坦面を設けている。試掘トレンチで確認した基底部と各段のテラスの標高は以下のとおりである。

	【前方部】	【後円部】
墳頂(現在の表土高)	約273.5m (比高差2.5m)	約277.5m (比高差8.5m)
2段目テラス	約271.0m (比高差3.0m)	約269.0m (比高差3.0m)
1段目テラス	約268.0m (比高差4.0m)	約266.0m (比高差2.0m~4.0m)
基底部	約264.0m	約262.0m~264.0m

後円部の基底部高に差が見られるのは、T4トレンチが基底石高約262.0mであるのに対しても、T6トレンチでは基底石高約264.0mを計測したからである。T6トレンチが尾根を開削して基底部を設けていることに起因する差異であり、通常の高さはT4トレンチの262.0m前後と想定される。したがって前方部・後円部とも、基底部と1段目テラスの比高差は4.0m、1段目テラスと2段目テラスの比高差は3.0mになる。2段目テラスと墳頂の比高差は、墳頂



後内部2段目テラスより墳頂を望む
(T5トレンチ)



後内部2段目テラス (T5トレンチ)



後内部2段目テラスの埴輪出土状況
(T5トレンチ)

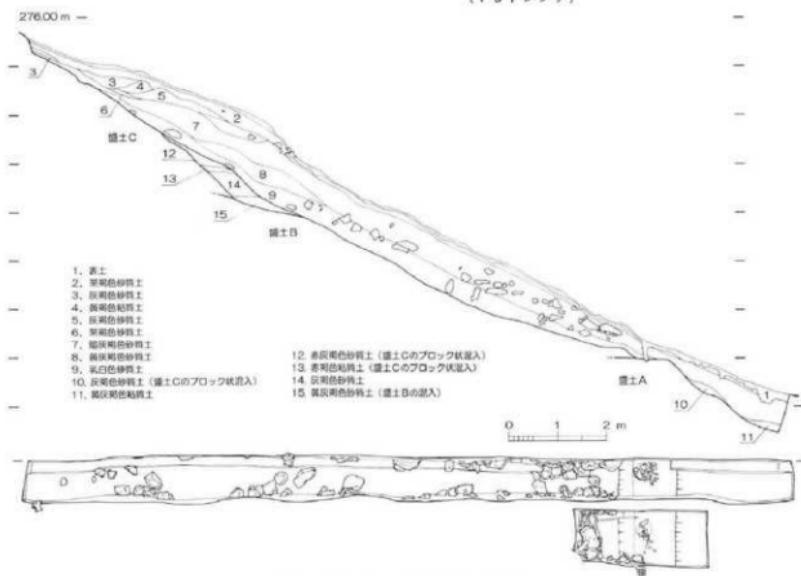


図5 T5トレンチ平面図・断面図

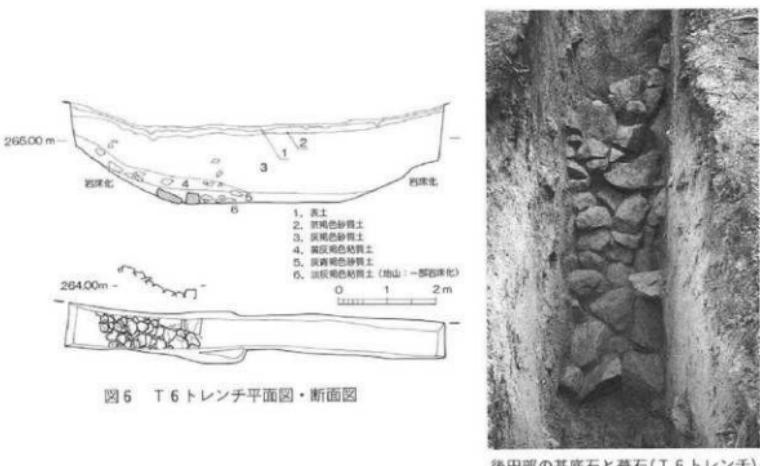


図6 T6トレーニング平面図・断面図

後内部の基底石と葺石(T6トレーニング)

が現在の表土高で示しているため正確でない。本来の比高差はさらに大きくなることが予想されるが、現状でも後円部の比高差8.5mは際立っている。なお、前方部と後円部の高さを比較すると、基底部・1段目テラス・2段目テラスそれぞれに前方部側が2m高くなっているのが留意される。

ここで基底部と各段のテラスについて、試掘調査によって明らかになったことを記しておこう。まず基底部について、前方部の基底部は平成15年度の調査で基底石と考えられる大型の石を確認したが、土砂の崩落が著しく明確な基底部は検出できなかった。一方、後円部では2箇所(T4・T6トレーニング)で良好な基底部を確認した(図4・6)。2箇所とも整形した地山の下端に40cm前後の大型の基底石を1段配し、その上を20~30cmの葺石で覆う。基底石・葺石とともに湖東流紋岩の割石を使用している。基底部の墳丘傾斜角は、30度(T4トレーニング)と33度(T6トレーニング)を測る。

各段のテラスは、前方部北西辺中央(T2トレーニング)と後円部中軸線(T5トレーニング)で2段目テラスを検出した。とくにT2トレーニングのテラスは遺存状態が良好であり、テラスの幅は約1.3m。盛土Cの上に灰褐色粘質土と赤褐色粘質土を厚さ10cm前後に薄く掻き固めて整え、その上に直径5~10cmの円礫を敷いていた(図3)。なお、各段のテラスは、これまで山麓の滋賀県立荒神山少年自然の家が設けたオリエンテーリングコース用の遊歩道と重複していると考えてきた。確かに墳丘西側の遊歩道は2段目テラスの位置におおよそ重なり、また前方部北西辺は1段目テラスには重複している。ただ、後円部南東側を大きく弧状に走る遊歩道は、基底部と1段目テラスの中位を走っており、テラスとは重複していない。

葺石

葺石は20~30cmの湖東流紋岩製の割石からなる。現状では、多くの葺石が土砂とともに崩落して下方に堆積しており、葺石が当初の姿を留めているのは基底部や段のテラス直上に限られていた。基底部では、「段築」の項で記したように後円部の2箇所(T 4・T 6トレンチ)で葺石を検出した。T 4トレンチでは基底石から上方へ約1mの間、T 6トレンチでは約2mの間、葺石が良好な状態で遺存した。T 4トレンチは基底石の直上数段が、やや乱れてはいるものの葺石の小口を外側に揃えるように下から上へ積み上げた小口積みで、さらに上になると葺石を盛土に貼り付けるように覆う貼石状の葺き方に変化していた。一方、T 6トレンチでは基底石の直上から貼石状に葺き上げている。段のテラスの例では、前方部のT 2トレンチで2段目テラスから上方約1.5m間で当初の葺石の姿を検出したが、T 6トレンチ同様に基底石直上から貼石状に葺き上げていた。つまり、当古墳の葺石の葺き方は必ずしも一定しておらず、T 4トレンチのように一部に古相の小口積み手法を残しつつ、全体としては貼石状に葺く手法へ移行していると推測される。因みにT 2の2段目テラスより上方の埴丘傾斜角は36度であった。

埴輪

今回の調査は試掘トレンチによる確認調査であり、埴輪の全容はつかみようもないが、これまでに円筒形埴輪・朝顔形埴輪・壺形埴輪の3種の埴輪片を検出している。ほとんどの埴輪片が葺石や多量の土砂とともに下方へ崩落した状態で出土しており、原位置を留めていたのはわずかに後円部中軸線のT 5トレンチ2段目テラスのみであった。隣接する埴輪を確認するため、西に拡張区を設けた。出土した埴輪は、下端部をかろうじて残しているだけであったが、盛土Aのテラスの上に埴輪を置き、灰褐色粘質土を10cm余りに薄く掲げて埴輪を固定していた。その上にはやはり円碟を敷いていたらしく、周囲で直径5~10cmの円碟を多数採集した。拡張区で出土した埴輪との距離は約1.2mを測り、この距離がテラスを巡る埴輪のおよその間隔と推測できる。各トレンチから出土した埴輪の位置から、埴輪が前方部の1段目テラス・2段目テラス・埴頂平坦面と、後円部の1段目テラス・2段目テラス・埴頂平坦面のそれぞれに巡っていたと想定している。

主体部

後円部の埴頂平坦面のおよそ中央に深さ0.8mの楕円形を呈する窪地があり、主体部の盗掘坑と考えられている。今回の調査対象とはしていないが、今後、詳細な調査を実施する必要がある。なお、近くの延寿寺(稻里町)から彦



荒神山古墳の現況（前方部より後円部を望む）

根市教育委員会へご寄贈いただいた考古資料の中に、荒神山出土と伝える車輪石がある。当古墳の主体部から出土したとする根拠はないが、時期的には齟齬しない貴重な資料である。
(谷 口)

出土埴輪の検討

荒神山古墳では過去の測量調査や踏査の際に、墳丘の各所で埴輪が採集され、報告されている。今回の調査では新たな埴輪の出土に加えて、原位置を留める埴輪やその配列について情報を得ることができた。

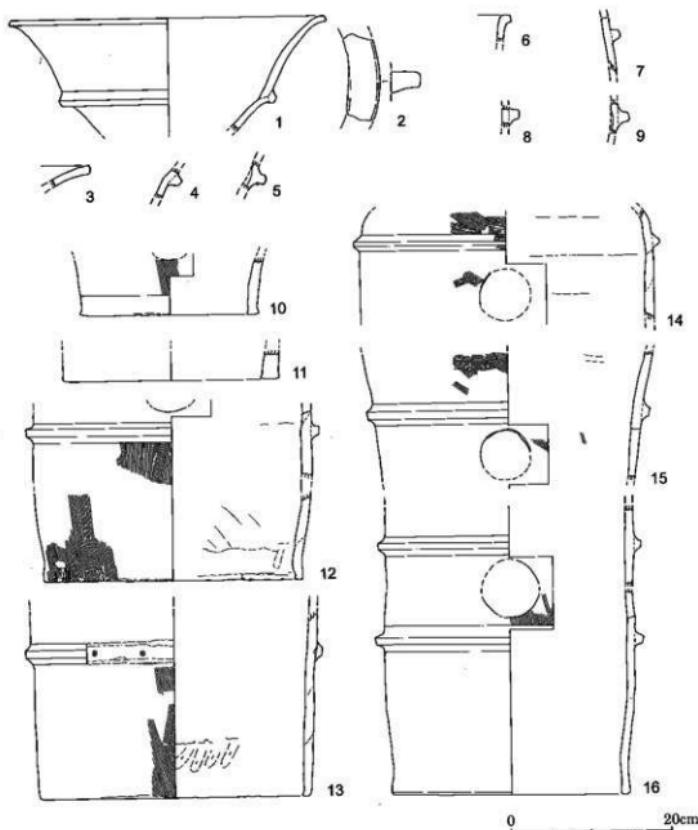


図7 荒神山古墳出土埴輪実測図

埴輪列は後円部のT 5 トレンチで2基の埴輪（12・13）が2段目テラスで確認できた。掘り方などは検出できなかったが、埴輪の間隔は1.2mで、底部の設置レベルが異なっていることから樹立に際して埋土による高さ調整を行なっている可能性を指摘できる。また、前方部のT 2 トレンチでは埴輪列は未確認だが、2段目テラスの整地土に多数の円碟が含まれており、各段のテラス上には埴輪の樹立とともに円碟が敷かれていたと考えられる。

出土埴輪全体については現在整理中のため、詳細な検討については後日に譲るが、概要について紹介する。埴輪は円筒埴輪、朝顔形埴輪、壺形埴輪が出土しているが、全形を復元できるものは認められない。以下では、まず円筒埴輪および朝顔形・壺形埴輪の肩部以下の部位について概観した後、一部の埴輪について個別の解説を行なう。

埴輪は底部径で23cm前後、30cm前後のものがある。円筒埴輪の口縁部の形態は口縁直下から外反するものがあるが、数が少なく不明な点が多い。突帯はやや低く台形状を呈するものが中心で、方形刺突によって設定されている。透孔は円形が大半で一部に方形がみられる。調整技法については外面は一次タテハケ調整が施され二次調整を欠くものが多く、赤色顔料を塗布している。胎土は黄白灰色系のものと赤褐色系のものがあり、前者は胎土の粗密により細分できる。なお、赤褐色系のものはハケメの単位が大きい。器壁の厚さは体部で0.9~1.3cm、基部では体部同様のものと2.0cm以上のもの（11）がみられる。

1・2はT 6 トレンチで墳丘外へ転落した状態で検出した。錫状突帯（2）を含むことから壺形埴輪と判断している。砂地に埋まっていたため風化が著しく、調整は確認できない。

5は朝顔形埴輪の口縁部突帯とみられる。図中では唯一赤褐色の胎土を持ち、T 2 トレンチ2段目テラスから出土した。図示していないが一次口縁部の破片には内面にヨコハケがみられる。

12はT 5 トレンチの西拡張区でほぼ原位置で出土したもので同一個体にまとまると考えられるものである。底部の半分は失われていたが、ほぼ原位置を留めていた。底部径は32cm前後とみられる。底部外面には乾燥時のひび割れとともに、突帯設定時の工具痕とみられる圧痕が認められる。

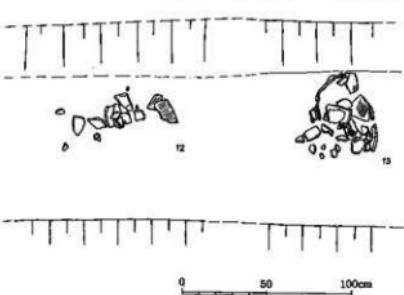


図8 T 5 トレンチ2段目テラスの埴輪列検出状況
(番号は図7の遺物番号)

13はT 5 トレンチ2段目テラスで底の2/3程度が原位置を留めていた。底部径は34cm、底部高は18.6cmを測る。突帯は方形刺突で設定されており、その間隔は7.5cmである。同一個体とみられる別の破片には円形の透孔がみられる。

14~16はT 5 トレンチ上部斜面で倒壊していたもので、同一個体と考えられる朝顔形埴輪である。14は肩部、15

は3条目突帯付近、16は底部から2条目突帯とみられる。底部径は30cm前後とみられ、底部高は19.6cm、1条目と2条目の突帯間隔は11cmを測る。

以上の埴輪の特徴や器種の組み合わせは、川西編年のII期でもやや新相を示しており、荒神山古墳が古墳時代の前期後葉（4世紀後半）に築造されたものと考える根拠となる。

（早川）

III おわりに

今回の調査は、古墳の全体からみればわずかな範囲に限られた試掘トレンチによる確認調査でしかないが、それでも大きな成果を得ることができた。まず荒神山古墳の年代については、古墳の形態や墳丘の構築法そして埴輪の形式分類などから古墳時代前期後葉（4世紀後半）と位置付けることができた。また、全長124mという規模は、安土町の瓢箪山古墳に次ぐ滋賀県下第2の前方後円墳であることが明らかになった。

これまで彦根市を含む湖東地域北部の旧犬上・愛知郡域は大型首長墳が知らない地域であった。しかし当古墳が確認されたことにより、当地域にも有力首長が存在したことが判明した。同時に当古墳が、3段築成の墳丘を備え、埴輪を巡らせ葺石で覆うなど、大和中枢部に築造されたものと同一様式をもつことから、大和とも深いつながりのある首長墳であることも明らかとなった。

しかも荒神山古墳は琵琶湖に向かって眺望が開けており、琵琶湖を意識した築造となっている。荒神山古墳や瓢箪山古墳が築かれた古墳時代前期後半には、それ以外にも大津市膳所茶臼山古墳・湖北町若宮山古墳・志賀町和途大塚山古墳などの前方後円墳が、琵琶湖を望む湖上交通の要衝に築かれるという共通点がある。荒神山古墳に埋葬された首長は、湖東北部地域を統括した有力首長であり、大和の王権とも深いつながりをもった首長であるとともに、環琵琶湖の湖上交通の権益も掌握していたことが推定され、古墳時代前期の近江の歴史を解き明かす上で重要な首長墳ということができよう。

（谷口）

〔主要参考文献〕

彦根市史編集委員会『彦根 明治の古地図 一』 彦根市 2001年

彦根市考古部会『新修彦根市史編さんにともなう彦根市内遺跡・遺物調査報告書』 2004年

滋賀県教育委員会『平成13年度 滋賀県遺跡地図』 2002年

近藤義郎編『前方後円墳集成 近畿編』 山川出版社 1992年

川西宏幸『円筒埴輪総論』『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会 1978年

報告書抄録

ふりがな	こうじんやまこふん							
書名	荒神山古墳							
シリーズ名	彦根市埋蔵文化財調査報告書 第36集							
編著者名	谷口徹・早川圭							
編集機関	彦根市教育委員会 文化財課							
所在地	彦根市尾末町1番38号							
発行年月日	平成17年(2005年)3月							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号					
荒神山古墳	彦根市 石寺町 山王山 1番1 ほか	25202		35度 14分 06秒	136度 11分 52秒	58m ²	20030609 ～ 20030812 20040802 ～ 20041110	範囲確認
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
荒神山古墳	古墳	古墳時代 (前期後半)	墳丘 葺石 段築	埴輪	全長124mの前方後円墳			

彦根市埋蔵文化財調査報告書第36集

荒神山古墳

—平成15・16年度 範囲確認調査概要—

平成17年(2005年)3月発行

編集・発行：彦根市教育委員会文化財課

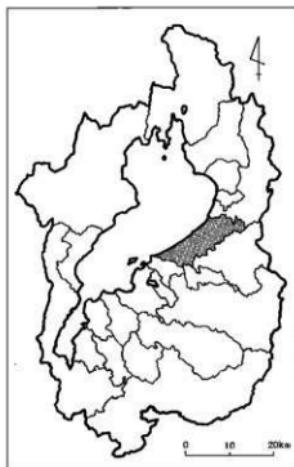
彦根市尾末町1番38号

Tel 0749-26-5833

印刷・製本：西濃印刷株式会社

岐阜市七軒町15番地

KOHJINYAMA TUMULUS



March, 2005

Hikone Educational Bureau
Cultural Asset Division